

天ブラの活動の歴史を紐解くとき、亡くなられた小柴博士を語らないわけにはいきません。今回はそのお話。

高梨直紘（東京大学）／平松正顕（国立天文台）



天ブラの観望会でこの屈折式望遠鏡に出会ったら、ぜひこの話を思い出して下さい

昨年11月12日、小柴昌俊博士が亡くなられました。その日の夜に予定されていた天体観望会の準備で慌ただしい中、私は訃報に接することとなりました。

超新星1987Aから飛来したニュートリノを捉えてニュートリノ天文学の礎を築いた功績によって、小柴先生がノーベル物理学賞を受賞されたことはいまさら説明するまでもないでしょう。私たちが学部生だった頃にはすでに現役を引退されていたため、小柴先生の講義を直接受けることはありませんでしたが、故戸塚洋二先生をはじめ多くの先生方が折に触れて小柴先生のお話を楽しそうにされていたのを懐かしく思い出します。

実は天プラは、小柴先生とは深い関わりがあります。ノーベル物理学賞を受賞された際に先生が受け取った賞金などを元に設立された平成基礎科学財団。私たちは、この財団が東京大学理学部及び素粒子物理国際研究センターと共

に実施した「楽しむ科学コンクール」に応募し、見事、その第1回目の優秀賞をいただくことができたのでした。2006年のことです。この時に私たちが提案したのは、小学校での天文部活動など地域密着型の天文普及活動のモデル作り。その実施費用はすべて財団から支給していただいたのですが、その額なんと100万円。貧乏学生だった私たちにとっては、とてもありがたい援助となったのでした。

ちなみに、この時に始まった活動のひとつが、現在も続く三鷹市立第四小学校での天文部活動「アストロクラブ」です。毎月のように宇宙の話をし、星や月を観察するという活動を長年にわたって行ってきました。これまでに在籍した児童は300名以上。最初の卒業生はすでに社会人となり、スタッフとして活動をサポートしてくれている者もいます。じわじわと地域に天文学が根付いていく過程そのものであり、天プラにとっても大事な活動

となっています。小柴先生が蒔いた種のひとつがこのような形で結実しつつあることは、とても嬉しいことです。

天プラはこの受賞に背中を押され、その後、さまざまな活動を展開していきました。六本木天文クラブのような少し派手な活動もあれば、東日本大震災の被災地を巡っての観望会など、地道な活動もあります。これらの活動で使う天体望遠鏡は、元をたどればこの時に購入した機材。小柴先生に繋がる天体望遠鏡で観望会ができるありがたみを感じながら、これからも活動を行っていきたいと思います。ご冥福をお祈りいたします。